

## 大正期東京北西部の生活様式

中 島 義 一

生活様式というものが人文地理の重要課題とされてから久しいが、その割に研究成果は多くない。東京府北豊島郡誌（大正7年刊）には町村別に風俗の項があり、衣食住・冠婚葬祭・年中行事について記されている。この記事を整理して当時の状況を見てみよう。北豊島郡は8町12村から成り、郡役所は板橋町にあった。現在の豊島・練馬・北・荒川区と足立区の一部に当る。東京市に隣接して市内同様の地域からほとんど都市化が及ばず純農村だった地域まであり、それに応じて生活様式の地域差もかなり大きい。

〔衣〕 ①絹服・綿服の別、日常は綿服で、中流以上の人は外出時には絹服というのが平均的で、巣鴨町・瀧野川町・日暮里町では中流以上は日常も絹、一方石神井村では絹は少数上流者が外出時に使用するのみ、大泉村では上下とも綿、赤塚村ではほとんど綿である。中新井村では婚礼でも綿服の者があると記されている。

②洋服、市内に隣接する地域では「頗る多い」（巣鴨町）、「少からず」（西巣鴨町）、10185人（瀧野川町）、約7500人（日暮里町）という状況であるが、農村部の志村・赤塚村・下練馬村・石神井村では50人未満、上練馬村と大泉村では人数は記さず、教師・警官のみとある。志村でも教師・官吏・会社員のみ、石神井村では教員が主と書かれている。尾久村の100人以上、三河島村の3～400人、岩淵町の400人が両者の中間というところである。これ等は男子に限られ、女子については日暮里町で少数、巣鴨町で極めて少数とあるものの、他の町村では記載がなく、皆無かそれに近い状態だったと思われる。また板橋町では「火薬その他の工場へ出入りする工男女多きを以て朝夕職服を着けて往來するものを見る」とある。職服というのが洋服かどうかはあきらかでない。

③洋傘・和傘の比、高田村の5割を最高に、日暮里町が4割、以下板橋町・西巣鴨町・瀧野川町・王子村・三河島村・志村・中新井村が3割以上と市街に近接した町村で洋傘の比率が高い。石神井村・尾久村で1～2割、上練馬村・下練馬村・赤塚村では1割以下である。

〔食〕 ①主食 米食か麦飯かの比率において、米食が8割以上なのは板橋町・巣鴨町・西巣鴨町・日暮里町

・王子町・高田村で、瀧野川町・岩淵町・三河島村、尾久村が6割以上。都市に近い町村と沖積低地の水田場の村で比率が高い。一方畑主体の台地の農村では「平素米飯を食うもの極めて少し」という上板橋村、米食は上層の4～50戸のみという赤塚村・中新井村、「上流者も平素は麦飯」という下練馬村では麦の混用量が上で2～3割、中が5割、下は7～8割としている。石神井村も米食は1割という。志村も麦飯3分の2である。

②副食 記述のない町村が多いが、肉食が盛だとしているのが巣鴨町・西巣鴨町・高田村、やや盛だというのが日暮里町、日を追うて盛なりという尾久村がある。一方下練馬村と石神井村は野菜と豆腐をあげ、赤塚村と下練馬では朝夕2回味噌汁を用いると記している。副食でも都市に近接する町村と農村部が対照的である。「野菜を主として肉を従と」する志村が中間的である。

③家族揃って食卓をかこむか。個別の膳を用いるか。珍らしい質問項目で興味深い。記載のない町村が少なくないが、前者が主（8割以上）というのが板橋町・西巣鴨町・瀧野川町・日暮里町・尾久村である。前者が少ないのは上練馬村と石神井村の各1割、2割以内は赤塚村と中新井村、下練馬村と志村が3割内外となっている。

〔住〕 ①屋根 全面的に瓦になっているのが板橋町・巣鴨町、一部に茅が残るが多くは瓦なのが西巣鴨町・瀧野川町・日暮里町・尾久村で、志村・上板橋村・下練馬村では瓦が漸次増加しつつある。石神井村は茅が多く、記載のない赤塚村・上練馬村も同様であろう。

②畳の縁の有無。これも珍らしい調査。少ない所（尾久村）でも4割、多い所（志村・上練馬村）では8割が縁なしである。市域に隣接する町でも5割から7割程度になっている。約20年後に東京市内で小学校だった筆者は柔道場以外では縁なしの畳を見たことがなく意外の感をもっている。

③燈火全部電燈またはガス燈というのは高田村のみ。電燈・ガス燈が主だがランプもあるのが板橋町・西巣鴨町・瀧野川町・日暮里町・岩淵町・三河島村・尾久村である。ランプの方が主なのは志村・赤塚村・下練馬村・中新井村で、上練馬村と石神井村は全村ラ

ンブである。電燈・ガス燈は供給区域外では利用できないから、個人の意思だけで採否を決められない事項である。1戸だけが行燈（あんどん）というものもある（瀧野川町）。

衣食住以外は割愛する。大正期に刊行された郡誌は多いが、このような事項が書かれている例は稀である。

記述は町村役場への照会によっているが長崎村は回答せず、南千住町は質問項目を無視して別の事を書いている。瀧野川町・赤塚村のように詳細に調査して回答している所もあるが、多くの町村は概数である。

（駒沢大学）

## 最近のベトナム

菊池 一雄

最初ベトナムにむかったのは1962年であった。当時ベトナムは南と北に分かれていたので政治的な意味合いで、南ベトナムのみ入国可能であった。以後ベトナム戦争の終了まで5～6回サイゴンなどの土を踏んだ。

しかしそれからしばらくベトナムに行くことが出来なくなり、やっと1987年になって、ベトナムの社会科学会の招待という形で北のハノイを中心に同国を訪れたのである。

こうしてこの国の北と南を訪れることが出来るまでには20年以上もかかってしまったわけである。

ここ何10年の間に、ベトナムは仏領、独立戦争、分断、統一等々大きな歴史的事実の連続であった。しかし地域性という点ではどうなのであろうか。

私は、はじめてこの国を訪れてから南北の特色を感じたが、それは南北に長い国、気候もちがうし、平野や山地の様子も随分違う。とくに水田をつくっている農村だけをみても紅河とメコンのデルタの人文的相違は一見しただけですぐ気がつくほどである。今度紅河のデルタを見て驚いたのは、メコンデルタとくらべて何よりも人が多いことで、これはたしかに仏領時代の地理学者のP・グールーが驚いて研究対象にしたのも無理がないと思った。ここではいろいろの型の村が密集し、さらに古い家々をみると、昔の地主の家、貧しい農民の家などの相違もまだみられる。ただ人民公社の建設が早かった為か、旧来の家とくらべると、比較的新しい公共建物があちこちにつくられ、まだ非常に少ないとはいえ近代的な農機具が導入されている。

社会主義農業の点では北と南では大体同一歩調をとっているようだが、農業方法の密度の差からくる地

域性を感じさせられた。それに広大なメコンデルタと違って、紅河デルタは余り遠くないところに約1000mのタムダオの山などがみられ、小じんまりとしているのである。

紅河にかかる橋はかつてはロンビエン橋があるのみだったが、今ではその上流にソ連の援助による新しい橋(下部には鉄道橋も併設)が出来ている。が、実用一点張りの感じである。現在のメコン川にはまだ橋はない。

ハノイの街の人口は、かつての10数万が現在250万人となっている。街としての施設は人口の膨張にともなわれない。とくに旧市街は仏領時代の儘である。ただ政庁周辺は国の独立を強く訴えている建物がある。現在のホーチミンとくらべるとハノイは質素で色々の面で対照的である。同じものと云えば外国書を並べる国営書店ぐらいいで、そこではソ連色が強く、約6割ほどの書棚をしめ、英・仏の本はそれぞれ2割ずつというところだろう。

山地に住んでいる人々は、少数民族が多かったが、現在ではキン族（いわゆる越族）も住むようになり、人種的にはまったく同じである。ただ生活方法となるとその変化はきわめて徐々にしか変らない。ここにも南と北の差異を感じさせられる。

今度のベトナム訪問の印象では、昔のような南北性ではないが、社会主義国としての新しい地域性とも云うべきもの、(それは一部では古い地域性をなくしてはいるが) が感じられた。そしてまたベトナムは近くのカンボジアやタイなどとも違う独特な国なのだと思う。

（早稲田大学）